

「自然」

～「四季」＝「季語」と「年中行事」～

日本の一年は気候の変化に富み、「春、夏、秋、冬」という季節の移り変わりに独特の^{おもむき}趣がある。

季節感溢れる言葉や、日本人ならではの美しい言葉が生まれた。

「春夏秋冬」を表す言葉が「季語」だ。四季折々の季語や言葉は、日本の多彩な表情と人々の豊かな暮らし、繊細^{せんさい}な心情を表す。それは、「俳句」に詠まれ、人々の生活に溶け込んでいる。

各地では地方色豊かな「年中行事」が繰り広げられる。

「俳句」は「五、七、五」の17音で成り立つ「世界で最も短い文学」だ。

季節に鋭敏な日本人は、「季語」を楽しみながら「俳句」を詠み、鑑賞する。

「季語」と「俳句」で、日本の「自然・四季」を紹介する。

「季語」は旧暦の言葉が多いため、新暦との間に時間的・感覚的なずれがある。

本書では、春(3月～5月)、夏(6月～8月)、秋(9月～11月)、冬(12月～2月)に分類した。

ただ、地球温暖化や、ハウス栽培(温室栽培)や養殖、冷凍・冷蔵技術の進歩などによって、野菜や魚介類が季節に関係なく手に入るため、季節の言葉が現代の人々の季節感と合致しない場合が少なくない。

食生活が豊かになった半面、「季節感が薄れた」、「食べ物や草花の^{しゅん}旬が分からなくなった」という声が聞かれる。



一節＝春

「春」の語源は、草や木が芽を出し、伸びることを意味する「張る」、あるいは、万物が発生するという意味の「発」、という説がある。

暦の上では、立春(2月3、4日頃)から立夏(5月5、6日頃)の前日までが「春」だが、人々が実際に春を感じるのは、3月になってから。

草木が芽生え、花をつけ、虫などは冬眠から覚める。

「春」は穏やかな日が多いが、「春に3日の晴なし」と言われるように、気候は変わりやすい。

「春」は卒業と入学の季節。児童、生徒、学生は3月に卒業し、4月に小学校(6年間)、中学校(3年間)、高等学校(3年間)、大学(2～4年間)がスタートする。

4月上旬に一年生の入学式がある。

日本の「春」を代表する花は「桜」だ。代表的な「桜」は「ソメイヨシノ」。

長い冬が終わり、「春」に美しく咲き誇る「桜」の花は日本人に好まれる。

最も南の沖縄県では2月に咲き始める。3月下旬から5月上旬にかけて「桜前線」が北上し、九州から北へ開花していく。桜の下での「お花見」は「春」の風物詩だ。

「桜」は、咲いている期間が短く、パッと散る。さらに、「淡い色」であるため、日本人の「潔さと優しさ」の象徴になっている。

江戸時代の国学者・本居宣長は

「敷島(「やまと」の枕詞)の大和心を人問わば 朝日に匂う 山桜花」と詠んだ。

旧暦では、3月は「弥生」、4月は「卯月」、5月は「皀月」と呼ぶ。

三月(弥生)

・春一番

「春」になって最初に吹く南寄りの強い風のこと。

人々は春の訪れを感じ、木の芽や花の蕾が膨らみ始める。

「春一番 砂ざらざらと 家を責め」(福田 申子男)

「声散って 春一番の 雀たち」(清水 基吉)

・春の雪

暖かくなって思いがけない時に降る雪。溶けやすい。淡雪ともいう。

「吹きはれて またふる空や 春の雪」(炭 太祇)

「古郷や 餅につき込む 春の雪」(小林 一茶)

・早春－初春

「春」の初め、木々の芽が膨らみ、水が温かく、空が明るく感じられる頃。

・雛祭り (ひな祭り)

3月3日。女の子の幸せを願う祭。桃の花を飾ることから「桃の節句」という。

雛壇に、内裏雛^{だいりびな}や五人囃子^{しろざけ}などの雛人形や菱餅、白酒、桃の花などを飾る。雛祭りが終わったら、雛人形を早く片付けないと、女の子はお嫁に行けなくなるという言い伝えがある。

「桃ありて ますます白し 雛の顔」(炭 太祇)

「野に出れば 人みなやさし 桃の花」(高野 素十^{たかの そじゅう})



・啓蟄^{けいちつ}

3月5、6日頃。気候が暖かくなって、冬眠していた虫が穴から出てくる。

「けっこうな 御世とや 蛇も穴を出る」(小林 一茶)

「啓蟄を くわえて雀 飛びにけり」(川端 茅舎^{かわばた ぼうしゃ})

・蛙^{かえる}

冬眠から覚めて、土から出てきた蛙は田などで「ケロケロ」と鳴きたてる。

「古池や 蛙^{かわず} 飛び込む 水の音」(松尾 芭蕉)

・山笑ふ(う)

木々が芽吹き、花が咲き始める山の明るい様子を表現する言葉。

「故郷や どちらを見ても 山笑ふ」(正岡 子規)

・鶯(うぐいす)

「ホーホケキョ」と美しくさえずる。日本の「春」を代表する鳥。

「春告げ鳥」ともいう。「梅に鶯」は、春の訪れを表す言葉。

「ケキョケキョケキョ」と鳴きながら、谷から谷へ、木の枝から木の枝へ飛ぶのを「鶯の谷渡り」という。

「鶯の とびうつりゆく 枝のなり」(横光 利一^{よこみつ りいち})



・水温^{ぬる}む

冬の寒さが緩んで、氷が解けて、川や池の水が温かくなること。

「これよりは 恋や事業や 水温^{たかはま きよし}む」(高浜 虚子)

・春の海

きらきらと明るく輝きわたり、のんびりとした穏やかな「春」の海の様子。

魚は餌を求めて泳ぎ回る。漁も盛んになる。

「春の海^{ひねもす} 終日のたり のたりかな」(与謝 蕪村)

・お水取り

3月13日、奈良・東大寺の二月堂で行われる。

関西地方では、これが終わると「春」がくる。午前2時頃、大きな松明^{たいまつ}を廊下で振り回してから、井戸水を本堂に運ぶ。松明の火の粉を浴びたり、井戸水を飲んだりして病氣や悪霊を払う。

「水とりや 氷の僧の 杓の音」(松尾 芭蕉)

・白魚^{しらうお}

体長6～7^{センチ}の半透明の細長い小魚。透き通って、形が美しいことから、「女性の美しい手(指)」を「白魚のような手(指)」などと形容する。

淡白で上品な味。吸い物、天ぷら、卵とじ、酢の物などにする。

「シラウオ」とよく似た「シロウオ」という小魚もある。

料理法はほとんど同じ。生きたままの「シラウオ」、「シロウオ」を、酢醤油をつけて食べるのを「^{おど}躍^ぐり食い」という。

「白魚の 目が見しものを 思ひをり」(加藤^{かとう} 楸^{しゅう} 邨^{そん})

・春の彼岸^{ひ がん}

「春分の日」をはさんで、前後3日ずつの7日間をいう。

墓や寺へお参りして先祖^{せんぞ}の霊^{れい}を供養^{くよう}する。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われる。

「何迷ふ 彼岸の入り日 人だかり」(上島^{うえじま} 鬼貫^{おにつら})

・燕

気候が暖かくなると南方からやってくる代表的な渡り鳥。

家の軒下^{のきした}に巣を作ることが多い。

田や畑の上を飛びながら害虫を食べる益鳥だ。

「今来たと 顔を並べる つばめかな」(小林 一茶)



・^{うすらい}薄氷

寒さが残る春先、水の表面が凍^{こお}って薄い氷を張る。薄い氷、つまり「うすごおり」のことだが、「俳句」では「うすらい（うすらひ）」という。

危険を感じ、不安な気持ちのことを「^{はくひょう}薄氷^ふを踏む思い」という。
「うすらひや わづかに咲ける ^{せり}芹の花」（^{たから い}宝井 其角）
「会いたくて 逢いたくて踏む ^{うすごおり}薄氷」（^{まゆずみ}黛 まどか）

・^{はるさめ}春雨

「春」の雨は、しとしとと長く降り続くことが多い。静かで趣のある雨。
草木を成長させ、花を咲かせる。

「春雨や ^{よもぎ}蓬をのばす 草の道」（松尾 芭蕉）

・^{せんてい}剪定

新しい芽が出てくる前に、果樹や樹木の伸びた枝を切って整えること。

風通しや日当たりを良くして、樹木の成長を促し、良い花を咲かせ、果実の生育を良くする。庭木の形を良くするために枝を切る剪定もある。

・木の芽

「春」になると木の芽が出てくる。可愛く、生命力を感じさせる。

「折々に 猫が顔かく 木の芽かな」（小林 一茶）

「大空に すがりたし木の芽 さかんなる」（^{わたなべ}渡辺 ^{すいは}水巴）

・若鮎

海で育った幼魚（4～6^{センチ}）が2、3月頃川へ^{さかのぼ}遡ってくるのが若鮎。

ただ、鮎釣りは6月から本格化するので、「鮎」は「夏」の季語。

「若鮎の 二手になりて 上りけり」（正岡 子規）

・^{かげろう}陽炎

うららかな「春」の日に、地面から立ち上る水蒸気が、ゆらゆらと揺れて見える現象をいう。「陽炎」の漢字は、燃えている太陽の炎のように見えことから。

「陽炎や 名もしらぬ虫の 白き飛ぶ」（与謝 蕪村）

・^{りゅうひょう}流氷

北海道のオホーツク沿岸では、春先になると、氷が溶けて漂流してくる。

広大な流氷の到来は大自然の雄大な光景だ。

北海道に遅い春の訪れを告げる。



・霞

「春」になって、大気が薄く濁り、遠くのものが見えにくくなる。

秋にも同じような現象があるが、これは「霧」という。

月の光が「霞」で薄くぼんやり光るのは朧月夜だ。

「春なれや 名もなき山の 薄霞」(松尾 芭蕉)

・土筆

早春の日当たりのいい土手や草むらに生える。

筆の形をしているので「土の筆」と書く。

佃煮や和え物にする。ほろ苦みのある味が独特だ。

「土筆にて 飯くふ夜の 台所」(正岡 子規)



・春風

暖かくて、穏やかな春の風。「しゅんぷう」とも読む。

「春風や 闘志いだきて 丘にたつ」(高浜 虚子)

四月(卯月)

・こぶし(辛夷)

3月から4月に、6弁の白い大きな花が咲く。

実が子供の拳に似ていることから「こぶし」の名が付いた。

「こぶし咲く あの丘 北国の ああ 北国の春♪♪～～」

と歌謡曲に歌われている。

「降りしきる 雪をとどめず 辛夷咲く」(渡辺 水巴)

・たんぽぽ(蒲公英)

キク科の多年草。黄色い野菊のような花を咲かせる。

白い綿のような冠毛をつけた種は風に乗って飛んで行く。

「蒲公英や 日はいつまでも 大空に」(中村 汀女)

「顔じゅうを 蒲公英にして 笑うなり」(橘 閒石)



・ 蝶

厳冬期を除いて見られるが、花の多い「春」に「卵から幼虫→さなぎ→成虫」に成長していく。3月頃飛び始める蝶を「初蝶」という。

「蝶の羽の 幾度越ゆる 塀の屋根」(松尾 芭蕉)

「ひらひらと 蝶々黄なり 水の上」(正岡 子規)

・ のどか(長閑)

天気の良い春の日の穏やかで、ゆったりした静かな気分をいう。

「長閑さに 無沙汰の神社 回りけり」(炭 太祇)

・ 菜の花

4月頃、畑一面に咲きにおう黄色い花。花と浅緑の葉のコントラストが美しい。

種からは菜種油を採り、花や葉は茹でて「お浸し」で食べる。

「菜の花や 月は東に 日は西に」(与謝 蕪村)

「菜畑に 花見がほなる 雀かな」(松尾 芭蕉)

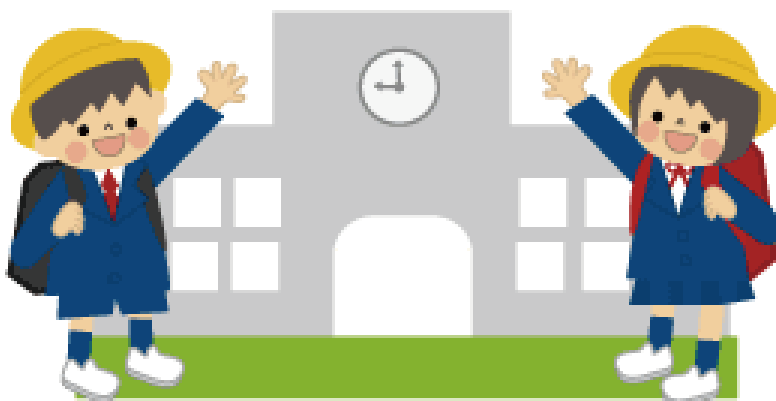
・ 入学－入学式

4月上旬に小学校、中学校、高校、大学などで入学式が行われる。

満6歳になった「ピカピカの一年生」は喜びと不安を胸に、小学校の門をくぐる。

「ハイといふ 返辞むづかし 入学す」(嶋田^{しまだ} 一歩^{いっぽ})

「入学の 吾子の緊張 われに似る」(富田^{とみた} 直治^{なおじ})



・ 春暁－春は^{あけぼの}曙

夜明けの空が明るくなってくる様子。薄暗い早朝の「春」の雰囲気をいう。

平安時代の女流文学者・清少納言は、随筆「枕草子」に、

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは すこしあかりて
紫だちたる雲の細くたなびきたる」と書いている。

・ 春の宵

「春」の日が暮れて、まだ薄明るい様子をいう。

夜が始まった時間。感傷的な気分が漂う。

「目つむれば 若き我あり 春の宵」(高浜 虚子)

・種蒔き

稲の苗を育てる苗代に粃を蒔くこと。

種蒔きの時期は、雀が鳴き始める頃、こぶしの花が咲く頃、山の残雪の形が変わる頃など、地方によってさまざま。

「種蒔いて 暖かき雨を 聴く夜かな」(村上 鬼城)

・桜

日本を代表する花。ソメイヨシノ、ヤマザクラ、シダレザクラなど。

開花は3月中旬、南の沖縄県から始まる。段々、日本列島を北上し、北海道では5月上旬に開花する。花が美しい満開の期間は短く、1週間ぐらい。

江戸時代の俳人・大島 蓼 太の句に、「世の中の移り変わりが早いこと」を例えた

「世の中は 三日見ぬ間の 桜かな」がある。

散り際の潔さから、「桜」は古来、武士道の象徴になっている。

塩漬けにした「桜」の花にお湯を注いだ桜湯はお祝いの席に出る。

塩漬けにした「桜」の葉で餅を包んだ桜餅も美味しい。

「さまざまの 事思ひ出す 桜かな」(松尾 芭蕉)

「見かぎりし 古郷の桜 咲きにけり」(小林 一茶)



・花見

花見と言えば、普通は、「桜」の花を観賞することをいう。

「桜」の花の下で、花を眺めながら、食事を楽しみ、酒を飲み、歌ったり踊ったりして、「春」の一時を過ごす。平安時代末期に宮中で行なわれたのが始まり。

3月下旬から5月上旬にかけて、各地で行われる。

「花見つゝ 花を他所なる 思ひごと」(市村 不先)



おぼろづき
・ 朧月

「春」の夜にぼんやりとかすんでいる月のこと。

「大原や 蝶の出て舞ふ 朧月」(内藤 丈草)

・ 花曇

桜の咲く頃、空が薄く曇っていること。穏やかな気分になる。

「音のみの 昼の花火や 花曇」(巖谷 小波)

しおひ
・ 潮干狩

潮が沖へ引いた海岸の砂浜でアサリやハマグリ(蛤)をとること。

「ふり返る 女心の 汐干かな」(大島 蓼太)



・ 竹の秋

青々とした竹の葉が、3月、4月頃になると黄色くなる。これが、草や木の葉が秋に黄色になったり、紅葉したりする様子に似ているので、その頃を「竹の秋」という。

・ 雀の子

4月頃、家の軒下などに作った巣の中で雀の雛が生まれる。

餌をねだって鳴く子雀の声がよく聞かれる。

庭の木などで、親鳥と遊ぶ「雀の子」の姿が見られる。

「我と来て 遊べや親の ない雀」(小林 一茶)

「いそがしや 昼飯頃の 親雀」(正岡 子規)



・ わさび(山葵)

根と茎をすりおろした「わさび」は刺し身や鮨の薬味に欠かせない。

「ツ〜ン」と鼻を突く味と香りが独特だ。溪流に自生する。

綺麗な水の流れを利用して栽培もされる。晩春に小さな白い花が咲く。

・ 行く春

終わろうとしている春のこと。ちょっぴり寂しい気持ちのこもった言葉だ。

「行く春や 鳥啼き 魚の目に涙」(松尾 芭蕉)

五月(皐月)

・八十八夜^や

立春(2月4日頃)から88日目の5月1日か2日。

霜が降りる日が少なくなり、野菜の種蒔きや稲の田植え、茶摘みなど、農家は忙しい。

「夏も近づく八十八夜♪♪～～」と、童謡に歌われている。

茶摘みは、八十八夜から2～3週間に集中する。

「音立てて 八十八夜の 山の水」(桂 信子^{かつら のぶこ})



・田植え

苗代^{なわしろ}で育てた稲の苗を水田に植えること。5月中旬にかけて行われることが多い。「田植え」は「夏」の季語。後ずさりしながら苗を植えていくのが昔ながらの田植え風景だが、近年は機械による田植えが普及している。

「勿体なや 昼寝して聞く 田植唄」(小林 一茶)

「やさしやな 田を植えるにも 母の側」(炭 太祇)



・博多^{はかた}どんたく

5月3、4日に行われる福岡市の祭。

老若男女が思い思いの服装で三味線や太鼓、しゃもじを叩いて市内を練り歩き、商店街の広場などの舞台で踊りを披露する。

毎年、200万人を超える観客で賑わう。「どんたく」の名前の由来はオランダ語の「ゾンターク(休日)」から。

• 鯉^{のぼり}幟（鯉のぼり）

5月5日は「こどもの日」。昔から「端午の節句」だ。

男の子のいる家では、布や紙で作った「鯉幟」を家の外に高く掲げる。大空に浮かぶ鯉の姿ように子供の成長を願う。家の中では、武者人形を飾り、柏餅や「ちまき」を食べる。

「月山^{がつさん やまがたけん}（山形県の山）へ 尾を跳ね上げて 鯉のぼり」（黛 まどか）



• 葉桜

桜の花が咲き終わる頃から黄緑色の葉が芽吹いてくるのが葉桜だ。

緑一色の桜も、花とは別の美しさがある。

• 立夏

5月6日頃。暦の上では、この日から夏に入る。「夏」の季語。



二節＝夏

「夏」の語源は、気温が高い意味の「暑い」・「熱い」や、植物が成長するという意味の「^な生る」などの説がある。

暦の上では、立夏(5月5、6日頃)から立秋(8月8、9日頃)の前日までだが、一般には、6、7、8月の三ヵ月が「夏」。長雨や厳しい暑さが続くが、輝く太陽の下で生き物すべての生命感がみなぎる季節だ。

7月、8月には、各地の神社を中心に夏祭りが繰り上げられる。

災難や疫病神を追い払うための神事が夏祭りの始まりだ。

盆踊りや花火大会、灯籠流しは日本の「夏」の風物詩だ。

子供たちや学生には長い夏休みがある。富士山などの登山客が増える。

「夏」は「お盆」の季節。先祖の霊を慰め、供養する仏教行事をお盆という。

東京など都会では7月中旬、地方では8月中旬に行う。

一週間前後の「お盆休み」をとり、お墓参りのため郷里に帰る人が多い。

新幹線や飛行機は「帰省客」で満席状態が続く。

高速道路はノロノロ運転の車が“^{じゅず}数珠つなぎ”になり、渋滞する。

旧暦では、6月は「^{みなづき}水無月」、7月は「^{ふづき・ふみづき}文月」、8月は「^{はづき}葉月」という。

六月(水無月)

・^{ころもが}衣更え(衣替え)

6月1日に、薄手の衣服に^{きが}着替えることをいう。

学校や会社の制服も「冬服・春服」から「夏服」に替える。

近年は5月中に衣更えをする人も。

「人は皆 衣など更へて 来たりけり」(正岡 子規)

・^{かつお}鰹ー^{はつがつお}初鰹

初夏から「夏」にかけての代表的な魚だ。最初に出回るのを初鰹という。

周りを火で焦がした「たたき」、刺身、煮魚、蒸して半乾きにした「生節」のほか、蒸してから乾燥させる「鰹節」など、いろいろな食べ方がある。

鰹節は薄く削って、煮物や汁の「^{だし}出し汁」に使い、ほうれん草などの「お浸し」にかけて食べる。

「目には青葉 ^{やまほととぎす}山郭公 ^{はつがつお}初松魚」(山口 ^{やまぐち}素堂 ^{そどう})

(注・鰹を「松魚」と書くことがある)。

・^{あゆ}鮎(アユ)

すらりとした形をした鮎は川魚の王様だ。

味は淡白で、鮎の塩焼きや鮎^{ずし}鮎がおいしい。川底で孵化した稚魚は、水流に乗って海に向かい6センチぐらいになる。夏になると、生まれた川に戻り川上へさかのぼる。上流で

20センチ～30センチぐらいに育つ。秋に産卵すると衰弱し、海に帰って一生を終える。

生まれて1年以内に死ぬ魚を「年魚」と呼び、鮎の別名になっている。

鮎釣りは6月1日前後に解禁になる。

「飛ぶ鮎の 底に雲ゆく 流かな」(上島 鬼貫)

・^{ばくしゅう}麦秋－麦の秋

麦は黄色に熟した初夏に収穫する。この時期を「麦秋・麦の秋」という。

「麦秋や 子を負ひながら いわし売り」(小林 一茶)

「麦秋や 蛇と戦ふ 寺の猫」(村上 鬼城)

・^{つゆ・ばいう}梅 雨

梅の実が熟する頃に降る長雨をいう。「梅雨」ともいう。

「梅雨入り・入梅」は6月上旬。約一カ月、じめじめした雨の日が多く、湿度が高い日が続く。梅雨に入っても雨が降らないのは「空梅雨」という。

「入梅や 蟹かけ歩く 大座敷」(小林 一茶)

・^{あじさい}紫陽花

小さな花がたくさん集まって「手まり」のように大きく咲く。

青、白、紫、薄い赤など。

色が青から紫に変化するので「アジサイの花は七変化」と言われる。

花が少ない梅雨に咲く紫陽花の美しさは格別だ。

「紫陽花に 雨きらきと 蠅とべり」(^{いいだ}飯田 ^{だこつ}蛇笏)



・^{さみだれ}五月雨

旧暦の5月、今の6月頃に降る長雨のこと。

「五月雨を あつめて早し ^{もがみがわ}最上川」(松尾 芭蕉)

(注・最上川＝日本海に流れる山形県の川)

・螢

水辺に住む昆虫。夜間、お尻で青白い神秘的な光を点滅する。

きれいな小川が少なくなったので、子供たちが小川の周りを光りながら飛び交う螢を追いかける光景は、あまり見られない。

「草の葉を 落つるより飛ぶ 蛍かな」(松尾 芭蕉)

「一命に 長短はなし 蛍の夜」(長谷川 ^{はせがわ} 秋子 ^{あきこ})



・蟹

川辺や磯で見られる甲殻類。梅雨時から「夏」にかけて活動する。

穴に入ろうとして、はさみを高く掲げて素早く横走りする姿はユーモラスだ。

「親蟹の 子蟹誘うて 穴に入る」(高浜 虚子)

・^{うかい}鵜飼

川で、鵜に鮎を捕らせる漁法のこと。舟の上で「かがり火」を焚いて、鵜に鮎を丸呑みさせた後、鮎を吐き出させる。鵜は首が長く、捕った鮎を喉に貯えておくことが出来る。鵜飼を職業としている人を^{うしゅう}鵜匠という。

岐阜県の長良川の鵜飼が全国的に有名だ。

「おもしろうて やがてかなしき 鵜舟かな」(松尾 芭蕉)



・ほととぎす(不如帰・時鳥)

初夏に日本にやってくる渡り鳥。俳句や詩歌に詠まれる。

鳴き声が「テッペンカケタカ」と聞こえる。

自分で巣を作らず、卵を^{うぐいす}鶯などの巣に産んで育ててもらう「^{たくらん}托卵」という習性がある。

「ほととぎす 大竹藪を もる月夜」(松尾 芭蕉)

すだれ
・ 簾

暑い「夏」の強い日差しを遮って、風通しをよくして、涼しく過ごすためのもの。葦の茎を編んだり、青竹を細く裂いたりして作る。ビニール製もある。

・ お中元

6月下旬から7月中旬頃までに、お世話になった人に感謝を込めて贈り物をする。

中国の道教で、旧暦の7月15日に神様に供え物をして罪滅^{つみほろ}ぼしをする「中元」という習慣が日本に伝わり、「夏」の「贈り物」になった。

七月(文月)

・ 山開き－海開き

7月1日から、富士山などの山で山登りが始まる。これを山開きという。

海では海水浴が出来るようになる。

たなばた
・ 七夕

7月7日、星に願い事をするのが「七夕」祭。

夜空に輝く「牽牛星^{けんぎゅうせい}(ひこぼし)」と「織女星(おりひめ)」が最も近づく、という伝説に基づいている。

子供たちは色とりどりの細長い短冊に夢や願い事を書いて、笹や竹につるす。

「うれしさや 七夕 竹の中を行く」(正岡 子規)



・ 枝豆

黄色くなる前的大豆を塩茹でにする。

「夏」に出回る枝豆が一番おいしい。ビールの「つまみ」として喜ばれる。

近年は、冷凍の枝豆が一年中食べられる。

「枝豆や 三寸飛んで 口に入る」(正岡 子規)

ゆうだち
・ 夕立

「夏」の夕方、突然激しく降り出す雨をいう。

局地的に降り、短時間で止むことが多い。

「夕立ちに ひとり外みる 女かな」(宝井 其角)

・朝顔

朝、ラッパ状の花が開き、昼にしぼむ「夏」の花。

7月7日前後の三日間、東京都台東区入谷の鬼子母神境内を中心に鉢植えの朝顔を売る「朝顔市」が有名だ。

「朝顔に 釣瓶とられて もらひ水」(加賀 千代女)



・祇園祭^{ぎ おんまつり}

7月1日から一カ月、京都市の八坂神社で行われる祭。

「宵山」と「山鉦巡行^{やまぼこ}」が行われる16日と17日が賑わう。

絢爛豪華な「山鉦」が、暑い「夏」の京都市内を賑やかに巡る。

「京都祇園祭の山鉦」は、2009年9月、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の「無形文化遺産」の代表リストに登録された。

・海の日^{うみ}

7月の第3月曜日。「海の恩恵^{おんけい}に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願う^{かいようこく}」国民の祝日。

・土用

「土用」と言えば夏の土用が一般的だ。7月20日頃が「土用の入り」。

最も暑い時期に、元気をつけるために、脂がのった栄養のある鰻の「蒲焼き^{かばやき}」を食べることが多い。

重箱にご飯を入れて、その上に蒲焼きをのせた「鰻重」や、井のご飯に蒲焼きをのせた「鰻井」が人気だ。

・虫干し^{むし ぼ}

土用の頃の晴天続きの日に、衣類、書画、道具などの湿気を取り、カビや虫の害を防ぐために太陽に干して風に当てることをいう。

特に、書物の虫干しを「曝書」という。

「なき人の 小袖も今や 土用干し」(松尾 芭蕉)

・夏痩せ^や

暑さに弱い人が、「夏」になると食欲がなくなり、体重が減ること。

「夏痩せて 腕は鉄棒より 重し」(川端 茅舎)

八月(葉月)

・花火

夕涼みをしながら家族で楽しむ「線香花火」や、夜空を彩る大掛かりな「打ち上げ花火」や「仕掛け花火」は「夏」の風物詩だ。

「暗く暑く 大群衆と 花火待つ」(西東 三鬼)

「なかなか 暮れぬ人出や 花火待つ」(高野 素十)

「一瞬の 命はげしき 大花火」(上野 章子)



・ねぶた祭

8月2日から7日まで、青森県青森市で行われる勇壮な祭。

和紙や竹、木などで作った巨大な人形、鬼、獣などを積んだ車や屋台、約30台が繰り出す。夜は、内部の照明で、人形などが色鮮やかに光り輝く。

多くの人が笛や太鼓に合わせて「ラッセラー、ラッセラー」の掛け声とともに街を練り歩く。睡魔を払う行事が始まり。「ねぶた」の名前は、「眠い」という言葉が訛った方言「ねぶたい」からきている。

同じ青森県の弘前市で8月1日から行われるのは「ねぶた祭」と呼ばれる。

・竿燈(灯)まつり

たくさんの「提灯」を結んだ竹の竿を、高く掲げて練り歩くことで知られる秋田市の祭。8月3日から6日まで行われる。

最も大きい「竿燈」は、長さ12メートルの竹の竿に、横に9本の竹の棒を結び付けて、それに46個の提灯をぶら下げたもの。笛や太鼓の囃子に合わせて、「竿燈」を、手を使わず、腰や肩、額に立てて提灯の灯を消さないように練り歩く。

200本近い「竿燈」が光を発しながら波打つように揺れ動く様子は、「光の稲穂」のようで、夜空に美しい。



たなばたまつり

・七夕祭

七夕祭は7月7日が多いが、宮城県仙台市の七夕祭は8月6日から8日まで。商店街には、大きな「クス玉」や細長い紙や布の「吹き流し」、千羽鶴、短冊などを飾りつけた長い笹竹が立ち並び、豪華さと美しさが人気だ。

《注・青森市の「ねぶた」、秋田市の「竿燈」、仙台市の「七夕」、山形市の「花笠祭（8月5日～7日）」を「東北地方の夏の四大祭」と呼ぶ》。

・立秋

8月8日頃。暦の上では、この日から秋が始まる。

暑さは続くが、風や雲に秋の気配を感じる。

立秋の後の暑さを残暑という。

・昼寝

「夏」の昼間、疲れをとるために、15分前後、寝ること。。

「愕然として 昼寝さめたる 一人かな」（河東 碧梧桐）

・浴衣

入浴後に着る着物が「浴衣」。今では、盆踊りや夏祭りなどに着て出掛ける。

「おもしろう 汗のしみたる 浴衣かな」（小林 一茶）

・山の日

8月11日。「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」国民の祝日。

2016年（平成28年）から始まった。

・団扇

何本かの細い竹を骨にして、紙や布を張って柄（持つところ）をつけて、それに絵を描いた円形の道具。

暑い時に、涼しくなるように、扇子のように、あおいで風を起こして使う。



・向日葵（ひまわり）

真夏の強烈な太陽の下で鮮やかな黄色い大きな花を咲かせる。

種は煎って食べたり、搾って食用油にする。

「向日葵の ゆさりともしぬ 重たさよ」（北原 白秋）

・そうめん（素麺）－冷麦

小麦粉を食塩水で練り、サラダ油などで引き伸ばし、細切りにして干す。

細いのが素麺、少し太いのが冷麦。茹でた後、水で冷やして食べる。

醤油と調味料の「たれ」と、生姜、紫蘇、ねぎの「薬味」で食べる。

涼味たっぷりの夏の食べ物。

「ざぶざぶと 素麺さます 小桶かな」（村上 鬼城）

ひややっこ
・ 冷奴

水や氷で冷やした豆腐。

小さく四角に切って、醤油と生姜、紫蘇、鰹節の「薬味」で食べる。

冷たくて淡泊な味が好まれる。

「舌にふと その冷えまこと 冷奴」(高浜 年尾^{たかはま としお})

・ ところてん^{ところてん}(心太)

紅色の海藻・天草を煮て、どろどろに溶かして型に入れて固めた食品。

細長い木箱に入れて小さい穴から突き出して紐状にする。

水で冷やして、酢醤油と辛子や蜂蜜などをつけて食べる。^{りょうみ}涼味満点だ。

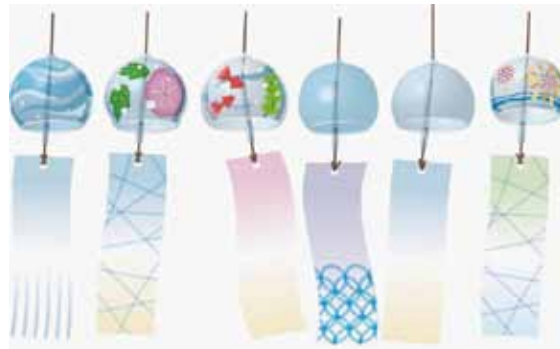
天草の別名「心太(こころぶと)」を「ココロテイ」と読んだことから、「ところてん」の名が付いた。

「後から押されて、何の苦労もなく、自然に前に進む」状態を「ところてん式」という。

「清滝の 水汲みよせて ところてん」(松尾 芭蕉)

ふうりん
・ 風鈴

軒先や窓につるして、風が吹くと「チリン、チリ〜ン」と、涼しげな音色を出す。鉄、ガラス、陶器製などがあり、形は釣鐘型、壺型など。短冊や重りを下げる。



うらぼん
・ お盆ー盂蘭盆

8月13日から15日を中心に行われる仏教行事。東京など都会では7月。

仏壇や墓に線香や花、水、果物、お菓子を供えて、亡くなった人たちの冥福を祈り、霊を慰める。働いている人は「お盆休み」で帰省し、墓参りをして先祖の霊を慰める。

「盂蘭盆や 無縁の墓に 鳴く蛙」(正岡 子規)

あわおど
・ 阿波踊り

8月12日から15日まで、徳島県徳島市で行われる。

浴衣を着た老若男女が三味線、太鼓、笛などに合わせて踊り回る。

独特の手の振り^{ひざ}と、膝を少し曲げた足取りがユーモラスだ。

「踊る阿呆に、見る阿呆、同じ阿呆なら、踊らにや損々」と、歌われる。

・ 終戦記念日

日本は1945年(昭和20年)の8月14日、ポツダム宣言を受諾し無条件降伏した。第二次世界大戦に終止符が打たれた。次の日の「8月15日」が、「戦争の過ちを繰り返さず、平和への誓いを新たにす」ための終戦記念日だ。

三節＝秋

暦の上では、立秋(8月8、9日頃)から立冬(11月7、8日頃)の前日まで。

一般には9、10、11月の3カ月が「秋」。

稲が黄色く実って田畑が「明るく」見えたり、草木が紅葉して「赤く」なったりすることが「秋」の語源だ。

澄み切った空、爽やかな風に安らぎを感じる。

読書の秋、芸術の秋、スポーツの秋、実りの秋、食欲の秋、行楽の秋だ。

「秋」を代表するものに、紅葉、赤とんぼ、秋刀魚、虫の声、稲刈り、ブドウや梨などの果物がある。

旧暦では、9月は「長月」、10月は「神無月」、11月は「霜月」という。

「神無月」は、旧暦の10月に全国の神々が男女の縁結びを相談するため、島根県の出雲大社に集まり、他の土地の神々が留守になる、という言い伝えから。従って、出雲地方では10月を「神有月」という。

九月(長月)

・防災の日

9月1日。1923年(大正12年)のこの日、東京を中心とした関東地方に大地震(関東大震災)が起こり、9万人を超える死者が出た。このため、この日を「防災の日」として、各地で大地震を想定した防災訓練が行なわれる。

・台風一二百十日

9月は、暴風雨を伴う台風の時期だ。

立春(2月3日頃)から数えて「二百十日」目に当たる9月1日頃は、特に、台風が襲来する。立春から220日目の「二百二十日」頃に上陸する大型台風も多い。台風を、「野の草を吹き分ける風」という意味で「野分」ともいう。

「日照年 二百十日の 風を待つ」(山口 素堂)

「吹きとばす 石は浅間の 野分かな」(松尾 芭蕉)

・敬老の日

9月の第3月曜日。「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」ための「国民の祝日」。

・名月一月見

9月半ば頃の、明るく、澄んで美しい月を「名月」という。

ススキの穂を飾り、団子や里芋、柿、栗などを供えて、月を眺めて楽しむのが「月見」。満月が「中秋の名月」だ。

「名月や 池をめぐりて 夜もすがら」(松尾 芭蕉)

「名月を 取ってくれると 泣く子かな」(小林 一茶)

「名月や 暈の上に 松の影」(宝井 其角)

・案山子

稲などの農作物を荒らす^{すずめ}雀などの鳥を追い払うために、竹や藁^{わら}や布^{ぬの}で作った一本足の人形。麦わら帽子をかぶせたりする。

秋になると、稲穂が実り、雀が飛び交^とう田畑に、ユーモラスな案山子が立ち並ぶ。

昔、魚や鳥、獣の肉を焼いて、その悪臭^かを嗅^かがせたことから、「嗅がし」が「案山子」の語源。

近年は^{いのしし}猪、^{さる}猿による農作物の被害が増え、「案山子」が役に立たない所では、田畑を金網で囲ったり、驚かすために花火を打ち上げたりする。



・灯火親しむ

秋の夜長に、「灯りの下」で家族が^{だんらん}団欒したり、読書でゆったりした気持ちを楽しむことを「灯火親しむ」という。

・秋の七草

「秋」の草花の代表として、「萩^{はぎ}、撫子^{なでしこ}、女郎花^{おみなえし}、藤袴^{ふじばかま}、桔梗^{ききょう}、芒^{すすき}、葛^{くず}」の七種類をいう。

・虫

秋の虫の声は、古くから人々に愛され、親しまれてきた。

鈴虫は「リーン、リーン」、コオロギは「コロコロ、リ、リ、リ、リ」、

松虫は「チンチロリン」、キリギリスは「ギョーッ、チョン」、

クツワ虫は「ガチャ、ガチャ」と鳴く。

「行水^{ぎょうずい}の 捨てどころなし 虫の声」(上島 鬼貫)

・稲刈り

稲穂は^{こがねいろ}黄金色に実り、早い地方では8月から稲刈りが始まる。

近年は、稲刈りから脱穀^{もみす}、籾摺り、精米までの作業は機械化されている。

・新米

その年に初めて収穫した米をいう。

九州など暖かい地方では8月には新米が出回る。

早い地方の新米は早場米、前の年の米は古米という。

「新米の くびれも深き 俵かな」(浅井 啼魚^{あさい ていぎょ})

・ 鰯雲^{いわしぐも}

秋空に浮ぶ白い雲が魚の鱗^{うろこ}のように並んでいる様子をいう。
漁師の間で、この雲が出ると鰯の大漁、という言い伝えから。
鯖雲^{さば}、鱗雲^{うろこ}ともいう。

・ 天高く馬肥ゆる秋

空が高く澄んで晴れわたっている「秋」は、馬は草をたくさん食べて、肥えて大きくなる。人も食欲が増して、なんでも美味しいので、食べ過ぎてしまう。
そんな「食欲の秋」を象徴する言葉。

・ 秋の風－秋風

人々は、「秋」に吹く風に寂しさ、わびしさを感じる。
「厭^あきる」と「秋」をかけて、男女の心変わりを「秋風が吹く」という。
「石山の 石より白し 秋の風」(松尾 芭蕉)
「物云えば 唇寒し 秋の風」(松尾 芭蕉)

・ 菊－菊人形

「菊」は奈良時代(710年～784年)末期に中国から渡来した。
香りが高く花は美しい。大菊、中菊、小菊などさまざまあり、色は黄色、白、赤紫が多い。
薬用、観賞用、食用として親しまれているが、江戸時代(1603年～1867年)には主に観賞用として栽培された。
三杯酢^{さんぱいず}(酢、醤油、砂糖・みりん)で食べる菊の花は、歯ざわりと爽やかな風味が好まれている。
「菊」は皇室の紋章^{もんしやう}になっている。
「菊」の花や葉を衣装にしたのが「菊人形」。歌舞伎の場면을再現したり、人気俳優や物語の主人公に似せて作る。
「菊の香や 奈良には古き 仏たち」(松尾 芭蕉)
「黄菊白菊 そのほかの名は 無くもがな」(服部 嵐雪^{はっとり らんせつ})



・秋祭り

穀物^{こくもつ}の実りに感謝して、豊作を喜ぶ祭。神社などで繰り広げられる。

・秋分の日

9月23日頃。「秋」の彼岸の中日。「祖先を敬い、亡くなった人々をしのぶ」ための「国民の祝日」。この日から夜の時間が長くなる。

・秋の暮れ

「秋」の日はあっという間に暮れていく。人は、そんな「秋」の夕暮れに、特に、寂しさと、わびしさを感じる。

清少納言の随筆「枕草子」は、「春は曙」とともに、「秋は夕暮れ」を称賛している。

「この道や 行く人なしに 秋の暮」(松尾 芭蕉)

「枯枝に 烏^{からす}のとまりたるや 秋の暮」(松尾 芭蕉)

十月(神無月)

・紅葉狩り^{もみじが}

「秋」が深まると、落葉樹、なかでも、楓^{かえで}、ななかまど、銀杏^{いちよう}、柿^{かき}、漆^{うるし}などの葉が赤や黄色に変わる。紅葉した山や木々の美しさを鑑賞することを「紅葉狩り」という川や湖に舟を浮かべて岸边や山の紅葉を眺めて楽しむ。

日本人は自然を愛し、自然の草、花、木を大切にする。

「きらきらと 紅葉まばゆし 藪の中」(正岡 子規)

「紅葉見や 顔ひやひやと 風渡る」(高桑^{たかくわ} 蘭更^{らんこう})

・秋深し

「秋」が深まると、周囲の光景に静けさや哀れさ、寂しさを感じる。

「秋深し 隣は何を する人ぞ」(松尾 芭蕉)

・時代祭

10月22日、京都市の平安神宮^{へいあんじんぐう}で行なわれる。

京都御所^{ごしよ}から平安神宮まで4.5^きにわたって、約2千人が、平安時代(794年～1192年)以降の歴史と風俗を再現した衣装で練り歩き、時代絵巻を繰り広げる。

平安神宮には、都を奈良から京都に移して千年の都^{みやこ}の基礎を作った桓武天皇^{かんむ}が祭られている。

5月の葵祭^{あおい}、7月の祇園祭^{ぎおん}とともに「京都三大祭」の一つ。

・鮭

「鮭」は、「秋」から「冬」に川をさかのぼって産卵する。卵は、約2カ月で稚魚になり、春に海へ下る。4年後の秋に産卵した川へ戻る。

近年、「鮭」の人工孵化^{じんこうふか}が盛んで、稚魚^{ちぎよ}を川に放流するなどで、漁獲量も増えている。川を遡ってくる直前の「鮭」が美味しい。塩焼きやフライや鍋料理^{りょうり}など。

一匹の鮭を塩に漬けた「新巻鮭^{あらまきじやけ}」は、お歳暮^{せいぼ}や正月の贈り物に使われる。

「鮭」の卵を一粒ずつ食塩水に漬けたのは「イクラ」。

「もの影の ごとくに鮭の さかのぼる」(阿部^{あべ} 慧月^{けいげつ})

・茸狩り

山野の湿った地面や朽木などに生えている茸^{きのこ}を採ること。一般に「きのこがり」という。

松茸^{まつたけ}、椎茸^{しいたけ}、まい茸、しめじ、なめこ、など。

「茸狩り」の代表格は松茸狩り。松茸はアカマツの根などに生える。香りがよく、歯応えがある。高価な松茸は、「秋の味覚の王様」だ。

「茸狩や 山よりわめく 台所」(森川 許六^{もりかわ きよろく})

「茸狩や 見付けぬ先の 面白さ」(山口 素堂)

・柿

古くから食用として栽培され、柿羊羹^{ようかん}、柿酢などにも加工される。

「柿」の葉で巻いた「柿の葉寿司」もある。

葉が落ちた枝に真っ赤な「柿」の実が残っている秋の田園風景は美しい。

「渋かろか 知らねど柿の 初ちぎり」(加賀 千代女)

「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」(正岡 子規)

十一月(霜月)

・文化の日

1946年(昭和21年)11月3日、戦争放棄などを定めた日本国憲法が公布され、2年後に、この日が、「自由と平和を愛し、文化をすすめる」ための「国民の祝日」になった。

文化の向上・発展・発達に功績のあった人に文化勲章が授与される。

・酉の市

11月の酉(十二支の10番目)の日に、各地の鷺^{おとり}神社で行なわれる祭。開運の神として信仰され、特に商売繁盛を願う。

江戸時代から続いている東京都台東区^{たいとうく}の鷺神社^{わし}の「酉の市」が有名。

参道に縁起物^{えんぎもの}を売る露店^{ろてん}が並ぶ。

主役は、福をかき集めると言われる竹製の「熊手^{くまで}」だ。愛嬌のある「おかめ」の面や、千両箱、大福帳、大判・小判などの縁起物で飾られている。

「酉の市」が3回ある年もある。

「世の中も 淋しくなりぬ 三の酉」(正岡 子規)

・立冬

11月8日頃。暦の上では「冬」。北の地方では初霜や初氷が見られる。

・渡り鳥

雁、鴨、つぐみ、ひわ、マナヅル、タンチョウヅルなど。

「夏」にシベリア方面で繁殖した鳥が越冬のため、数千^キ以上を飛んで日本にやってくる。大群となって飛ぶ光景は「鳥雲^{ちょううん}」と呼ばれる。

「喧嘩すな あひみたがひに 渡り鳥」(小林 一茶)

「大風に 傷みし木々や 渡り鳥」(河東 碧梧桐^{かわひがし へきごとう})

・七－五－三の祝い

11月15日を中心に行われる5歳の男の子、3歳と7歳の女の子のお祝い。親子連れで、神社に参拝し、健やかな成長をお祈りする。

宮中や貴族の間で行なわれていた行事が一般社会に普及した。

神社の境内には、長寿にちなんだ「千歳飴」などを売る店が立ち並ぶ。

「よくころぶ 髪置の子を ほめにけり」(高浜 虚子)

「袴着や 子の草履とる 親ごろ」(小西 来山)

(注・髪置＝2、3歳まで剃っていた髪を初めて伸ばす昔の儀式。

袴着＝5歳になった男の子が初めて袴をはく儀式)



・行く秋

「秋」が終わるのを惜しむ気持ちを込めた言葉。

「行秋や 抱けば身に添ふ 膝頭」(炭 太祇)



四節 = 冬

「冬」の語源は、「冷える」という意味の「冷ゆ」。

暦の上では、立冬(11月7、8日頃)から立春(2月3、4日頃)の前日まで。

一般には12、1、2月の3カ月。

長い日本列島の太平洋側は乾燥した晴天の日が多く、日本海側は大陸からの北西の季節風が吹いて寒い日が多く、雪が降る。

北海道や東北、信越、北陸地方の人たちは雪との長い闘いが続く。

南の沖縄県では雪はほとんど降らない。

大晦日おおみそかの夜が明けると、元旦(1月1日)だ。

「一年の計は元旦にあり」という。人々はこの日を特別に大切にする。

2月は寒さが最も厳しい。

旧暦の別名は、12月が「師走しわす」、1月が「睦月むつき」、2月が「如月きさらぎ」。

一年の始まりである1月は、家族が揃って楽しく過ごし、友人、知人がお互いに新年を祝う。「仲良くする・親しみ合う」という意味の「睦むつむ」ことから、1月を「睦月」という。

十二月(師走)

・木枯らしこがらしー 凧こがらし

「冬」に吹く冷たい風をいう。「木を吹き枯らす」という意味。

最初に吹くのを「木枯らし1号」という。

「凧」は、峠とうげ、働くなどと同じで、日本で作った国字。

「凧や 海に夕日を 吹き落す」(夏目 漱石なつめ そうせき)

「木がらしや 目刺にのこる 海の色」(芥川 龍之介あくたがわ りゅうのすけ)

・お歳暮せいぼ

日頃、お世話になった人に感謝の印として品物を贈る。

11月中旬から12月上旬、デパート、スーパー、商店街には「お歳暮コーナー」が設けられ、買い物客で賑わう。

「師へ父へ 歳暮まゐらす 山の薯いも」(松本 たかし)

・炬燵こたつ(こたつ)

もともとは、畳や床に炉を作った暖房設備。炭、練炭、赤外線暖房器を炉の中に入れ、「やぐら」を置いて布団を被せたもの。四方から足を入れて、温まる。

冬に、炬燵こたつを囲んで楽しく過ごす家族の団欒風景が見られる。

電気ヒーター付きの炬燵もあるが、「エアコン暖房」の普及で、炬燵そのものが少なくなった。

「炬燵出て 古郷こひし 星月夜」(池西 言水いけにし こんすい)

・羽子板^{はごいた}－羽子板市

正月に、女の子たちが「羽子板」で「羽根」を突き合って遊ぶのが羽子板。

黒く堅いムクロジの実に、小さい鶏の羽を数枚差し込んで「羽根」を作る。

「羽子板」は長方形の板。「羽子板」には、有名な俳優や歌舞伎役者、スポーツ選手を、綿やきれいな布で作った立体感のある「押し絵」を貼り付ける。飾り物として人気がある。

12月17日から3日間、東京・浅草^{せんそうじ}の浅草寺で開かれる「羽子板市」が有名。

「羽子板の 役者の顔は みな長し」(山口 青邨^{せいそん})



・日向ぼこ^{ひなた}(日向ぼっこ)

家の縁側^{えんがわ}やベランダ、公園などで、「冬」の日光を浴びて温まること。

「うとうとと 生死の外や 日向ぼこ」(村上 鬼城)

・焚火^{たきび}

暖を取るため、家の庭などで落ち葉や枯れ木を燃やすこと。「冬」の風物詩。

・冬至

12月22、23日頃。一年中で昼の時間が最も短い。

この日、柚子湯^{ゆずゆ}に入ったり、南瓜^{かぼちゃ}や「こんにゃく」を食べると、風邪を引かないと言われる。

・鍋物

【寄せ鍋】

「冬」の食卓に欠かせないのが「寄せ鍋」などの鍋物だ。

「寄鍋や たそがれ頃の 雪もよひ」(杉田 久女^{すぎた ひさじょ})

【おでん】

大根やこんにゃく、竹輪^{ちくわ}、卵などを煮込んだもの。冬の定番料理だ。

「おでん」の名は、串刺しにした豆腐を焼いて味噌を付けた「田楽^{でんがく}」から。

「おでん酒 わが家に 帰り難きかな」(村山 古郷^{むらやま こきょう})

【湯豆腐^{ゆどうふ}】

豆腐を鍋に入れ、昆布^{こんぶ}と一緒に煮て熱くする。

醤油と刻んだねぎ、鰹節^{かつおぶし}などで食べる。

簡単に出来る「冬」の人気料理。

京都・南^{なんぜん}禅^じ寺の湯豆腐が有名。

「湯豆腐や 蝦^え夷^ぞの板昆布 跳上がり」(渡辺 水巴)

(蝦夷=昆布の生産地として知られる北^{ほっかい}海^{かい}道^{どう}の古い呼び名)

・注^し連^め縄^{なわ}－注連^{しめ}飾^{なわ}

稲の藁で作った縄の輪に、細工をした紙を垂らしたのが「注連^{しめ}縄^{なわ}」だ。

新年に神様を迎えるため、神社の社殿前や家の神^{かみ}棚^{だな}に飾る。

大晦^{おおみそ}日(12月31日)までに取り付ける。

大小、さまざまな形があるが、3本、5本、7本の藁を使うこともあることから「七^し五^ご三^{さん}縄^{なわ}」とも書く。

「注連^{しめ}縄^{なわ}」に 橙^{だいだい}や昆布、伊勢^い海^せ老^えなど付けて、縁起物の飾りとして、「魔^ま除^よけ」や願いを込めて、家の玄関などに飾るものが「注連^{しめ}飾^{なわ}」だ。

日頃使っている機械、農機具、自動車、自転車、船などにも、安全を願って「注連^{しめ}縄^{なわ}」や「しめ飾り」を飾る。

「女手に 注連^{しめ}飾^{なわ}打^うつ 音^ひきこ^のゆ」(日^ひ野^の 草^{そう}城^{じょう})



・童謡「お正月」

東^{ひがし}く^め・作詞、滝^{たき}廉^{れん}太^た郎^{ろう}・作曲。

子供たちのお正月が待ち遠しい気持ちを歌った唄。

明治時代の後半に作られたが、今でも、よく歌われている。

♪♪♪ もう いくつねると お正月 お正月には 風^{たこ}あ^げて
こまをまわして 遊^{あそ}びま^しょう はやく来^こい来^こい お正月 ♪♪♪

・御^ご用^{よう}納^なめ

12月28日頃、一年の仕事を終えること。1月4日頃までが年末年始の休暇。

・行^いく年^{ねん}

終わろうとする年のこと。次の年は「来る年」。

「行^い年^{ねん}や 何^{なん}に驚^{おど}く 人^{ひと}の顔^{かお}」(尾^お崎^{さき} 紅^{こう}葉^{よう})

・なまはげ

12月31日に行なわれる秋^{あき}田^た県^{けん}・男^お鹿^が半^{はん}島^{とう}に伝わる風習。

大晦日の夜、村の青年が2～3人一組になって、鬼の面をかぶり、蓑^{みの}と藁^{わら}靴^{ぐつ}で、「ウオ一、ウオ一」と奇声を発し、大きな木と銀紙で作った刃^は物^{もの}や棒を振り回し「泣^なく子^こはい

ねがあ(泣く子はいないか)」と大声を上げながら家を回る。

子供たちは、「なまはげ」の恐ろしい姿に脅えながら、親にすがって泣きじゃくる。親が「なまはげ」に謝り、酒や餅を渡して、家族の無病息災をお願いする。



• おおみそか 大晦日

一年の最後の日。「おおつごもり」ともいう。

12月31日に、これからも「細く長く」生きることを願って、「年越し蕎麦」を食べる風習がある。

「掃かれざる 道も暮れけり 大晦日」(今村 俊三)

• じょやかね 除夜の鐘

12月31日の夜から、寺で108回突く鐘のこと。

人間には「心身を悩ます迷いや怒りや欲望」という煩惱が108あると言われている。この煩惱を消滅させて、新しい年を清らかな気持ちで迎えようというのが除夜の鐘だ。鐘が終わるまで40～50分かかる。

人々は、その間。一年間をしみじみ思い返す一時だ。新しい年(1月1日)の午前0時に突き終るのが本来だが、近年は、午前0時を挟んで突く寺が多い。

一月(睦月)

• 新年

新しい年。なかでも新しい年の初めの時期をいう。

「新年の 山見てあれど 雪ばかり」(室生 犀星)

「三面鏡 ひらきて素顔 年迎ふ」(橋本 美代子)

• がんじつ はつもうで 元日ー元旦ー初詣

新しい年の初めの日の1月1日が元日・元旦。「国民の祝日」。

神社や寺院で、一年の健康と幸福をお願いするのが「初詣」。正月三が日(1日～3日)にお参りする。

「元日」の「初日の出」を拝むために山や海岸へ行く人も多い。

「元日や 此心にて 世に居たし」(高桑 蘭更)

「日本が ここに集る 初詣」(山口 誓子)

「初詣 善男善女の 代に似たり」(香西 照雄)

・正月

一年の最初の月が「正月」。

「正月」の特別な料理が「お節料理」だ。昆布巻、玉子焼き、かまぼこ、数の子（^{にしん}鰯の卵）や、里芋、蓮根の煮物など。

お節料理の前に飲むお酒が「屠蘇」。

正月の楽しい浮かれた気持ちを「お屠蘇気分」という。

・^{ぞうに}雑煮

お餅を、鶏肉や野菜、かまぼこ、シイタケなどの汁に入れた料理。

「三が日」の朝、家族そろって雑煮と「お節料理」を食べて祝う。

関東地方では「切り餅」を焼いて醤油味の汁が一般的。

関西地方では「丸い餅」で白味噌の汁が多い。

「^{ぬりわん}塗碗の 家の久しき 雑煮かな」（正岡 子規）



・^{はつはる}初春－迎春

「新年」を迎えた気持ちを表す言葉が「初春」や「迎春」。

賀春、「春」も新年のこと。

「初春や 眼鏡のままに うとうとと」（日野 草城）

「目出度さも ちう位なり おらが春」（小林 一茶）

・年賀－年賀状

「新年」のお祝いを述べることを年賀という。

親戚や友人、知人に「年賀状（年賀はがき）」で年始の挨拶をしたり、一年間のご無沙汰のお詫びをする。

・お年玉

「正月」に親や大人が、子供たちや孫、親戚の子どもに贈るお金。

子供たちにとって正月の大きな楽しみ。

「年玉を 並べて置くや ^{まくらもと}枕元」（正岡 子規）

「とし玉の さいそくにくる ^く孫子かな」（小林 一茶）

「お年玉 ちらと見くらべ ^{なかやま}姉いもと」（中山 きりを）

・門松^{かどまつ}

「正月」に家の玄関や門口に立てて飾るもの。

一対^{いっつい}の松に竹などを加える。

普通、門松は1月7日まで立てる。その期間を「松の内^{まつうち}」という

「酔ひつれて 雪駄^{せった}鳴らすや 松の内」(尾崎 紅葉)



・初夢^{はつゆめ}

「元日」の夜か2日の夜に見る夢。

どんな夢を見たか、で一年間を占ったりする。

枕の下に宝船の絵を敷いて寝ると「いい夢」を見る、言われている。

初夢は、「一・富士、二・鷹^{たか}、三・茄子^{なすび}」の順に縁起が良い、という言い伝えがある。

「初夢の 忘れやすさの 目出度けれ」(高木 晴子)

「初夢を 話しみる間に 忘れけり」(星野 立子)



・書き初め^ぞ

「新年」になって最初の書道。

「夢」、「希望」、「平和」、「春」など、めでたい文字を選んで、2日に書くことが多い。

「書初の ことさら太き 筆選ぶ」(増成^{ますなり} 栗人^{くりと})

・正月の遊び

子供たちが、「正月」に遊ぶのは、家の外では凧(タコ)揚げ、独楽(コマ)回し、羽根突き。家の中では双六^{すごろく}、歌留多(カルタ)、トランプなど。

しかし、近年は、テレビ・ゲームで遊ぶ子どもが増えている。

**たこあ
凧揚げ**

= 竹で作った枠に紙を張ったのが凧。それに糸を付けて空高く飛ばして遊ぶ。

「凧抱いた なりで すやすや 寝たりけり」(小林 一茶)



**こままわ
独楽回し**

= 丸い木に鉄の心棒^{しんぼう}を差し込んだのが独楽。それに紐を巻いて、その後に糸を強く引いて、回転させる。

「独楽うつや なかに見知らぬ 子がひとり」(村上 しゅら)^{むらかみ}



**はねつ
羽根突き**

羽子板で羽根を突き合って遊ぶ。

羽根を落とした人が負け。

負けると、顔に墨を塗られるのが昔からの遊び方。

「羽子板や 唯にめでたき うらおもて」(服部 嵐雪)

「音^さ湧えて 羽根の羽 白し 松の風」(泉^{いずみ} 鏡^{きょう}花^か)



双六
すごろく

=大きな紙にいろいろな絵を描いて、十数カ所の「中継点」を作る。サイコロを

振って出た目の数だけ進む。「振り出し(スタート)」から早く「上がり(ゴール)」に到着した者が勝ち。

サイコロの目でぴったりゴールに着かなければ勝てない。

例えば、『「上がり」まで「あと三つ」の所で、サイコロを振ったら「5」が出た』場合、「上がり」まで「3」進んだ後、残りの「2」はバックする。また、途中で、「振り出しへ」という「中継点」に止まったら、「振り出し」に戻る。

「双六の 絵をたのしみて 遊びけり」(深川 ふかがわ 正一郎 しょういちろう)

かるた

=カードを使って、数人で遊ぶゲーム。

「百人一首」や「いろは・がるた」など。トランプもある。

「とられたくなし 歌留多 かるた 眼にて押へ」(池上 いけがみ 不二子 ふじこ)

・御用始め

役所や会社などが4日頃、その年の仕事を始める。

この日は、役所や企業のトップが念頭の抱負を述べ、職員や社員は発展と努力を誓い合う。

・出初め式 でぞしき

1月6日頃、都道府県、市町村の消防署や消防団が消火演習をすること。

江戸時代からの「はしご乗り」や最新鋭の消防機器が披露される。

・七草ー七草粥 ななくさ がゆ

「せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」を春の七草という。

1月7日の朝、お粥に春の七種類の野菜を入れた「七草粥」を食べる。

ご馳走を食べ過ぎて疲れている胃を休める効果もある。

「七草や 兄弟の子の 起きそろひ」(炭 太祇)

・福寿草 ふくじゅそう

寒い季節に黄金色の花を咲かせる高さ3センチ～6センチの花。

縁起のいい名前と、花の少ない時期に咲くことから珍重される。

・寒ー寒稽古 かん げい こ

「寒の入り」(1月5、6日頃)から「寒の明け」(2月4日頃)の前日までの約30日間が「寒の内」。

1月21日頃、寒さが最も厳しいのを「大寒」。

この時期の手紙は「寒中お見舞い申し上げます」と書き出す。

柔道 じゅうどう、剣道 けんどう、弓道 きゅうどうなどの武術の修行をする人たちが心身の鍛錬のため、寒さの厳しい時期の早朝にする稽古を「寒稽古」という。

かがみびら
・鏡開き

「正月」に、床の間や神棚に大小二つの丸い餅を重ね、みかんや伊勢海老などをのせて飾ったのを「鏡餅」という。

1月11日に、雑煮やお汁粉^{しるこ}で食べる。

「切る」という縁起の悪いことをしないために、鏡餅を包丁で切らないで、金槌^{かなづち}などで叩き割ることから、「鏡開き」という。

「傍観す^{おんな}女手に鏡餅 割るを」(西東^{さいとう} 三鬼^{さんき})



・成人の日

満20歳になった男女を祝福する日。「1月の第2月曜日」。

「おとなになったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます」国民の祝日。

20歳を「はたち」という。

しもばしら
・霜柱

地中の水分が寒さで柱状の氷になって地面を押し上げる。

霜柱の上を歩くと、「サク、サク」、「ザク、ザク」という音がする。

ふゆごも
・冬籠り

冬の間、人や動物が家の中や巣の中に閉じこもって外に出ないこと。

「腰あげて すぐ又坐る 冬籠」(高浜 虚子)

「読みちらし 書きちらしつつ 冬籠」(山口 青邨)

・雪

日本の「四季」の景観を代表する「雪月花」の一つ。

多くの詩歌や俳句の題材になっている。

雪は六角形の結晶が多いので「六つの花」ともいう。

細かい雪が風に乗ってちらちら舞う様子を「風花^{かざはな}が舞う」という。

雪は、形や状況によって、様々な呼び方がある。

白雪、粉雪、牡丹雪、ざらめ雪、細雪^{ささめ}、小雪、淡雪、根雪、なごり雪、風雪、吹雪^{ふぶき}など。

「降る雪や 明治は遠く なりにけり」(中村^{なかむら} 草田^{くさた} 男^お)

みぞれ
・ 霽

雪が解けて雨^ま混じりになり、雪と雨が一緒に降る現象をいう。
「古池に 草履沈みて みぞれかな」(与謝 蕪村)

かじか
・ 悴む

寒さで手足の指先の感覚がなくなること。
「手がかじかむ」という言い方をする。

・ しばれる

厳しく冷え込むことを、北海道、東北地方では「しばれる」という。

つらら
・ 氷柱

家の軒や木から落ちる水のしずくが、凍って棒のように垂れ下がったもの。
「御^み 仏^{ほとけ}の 御^お 鼻^{はな}の先へ つららかな」(小林 一茶)

たまござけ
・ 卵酒

お^{かん} 燗をした日本酒に生卵を入れてかき混ぜ、砂糖を加えたのが卵酒だ。
風邪気味の時に飲むと、体の芯から温まって、風邪を治してくれる。
「親も子も 酔へばねる気よ 卵酒」(炭 太祇)

二月(如月)

せつぶん
・ 節分一豆まき



季節の変わり目が「節分」だが、一般には立春の前日の2月3日か4日頃。春を迎え、悪魔を追い払うために、「豆まき」をする。

日本では宮中で約1300年前に行なわれたのが始まり。

室町時代(1392年から約180年間)に大豆^{だいず}をまく習慣が始まった。

子供たちが「鬼は外、福は内」と叫びながら、炒った大豆を鬼の面をかぶった人にぶつける。

神社や寺では、その年の干支^{えと}に当たる「年男^{としおとこ}・年女^{としおんな}」の俳優やスポーツ選手が高い所から豆をまく。

鬼や悪魔が家に入ってくないために、戸口に「^{ひいらぎ} 柊の枝」を挿したり、「^{いわし} 鰯の頭」を

刺しておく地方もある。

「豆を打つ 声のうちなる 笑かな」(宝井 其角)

・立春

「節分」の翌日の 2 月 4 日頃。暦の上ではこの日から「春」だ。

北海道や東北、北陸などではまだ雪の季節だが、人々は春の兆しを感じ取る。

「春立つや 誰も人より さきに起き」(上島 鬼貫)

・春浅し

暦の上では春だが、冬の気配が残り、まだ春は浅い、と感じる。

「早春賦」という唱歌に、「春は名のみ 風の寒さや、♪♪」とある。

・雪まつり

「札幌雪まつり」が有名。

毎年 2 月 6 日頃の金曜日から一週間、北海道札幌市の大通り公園で繰り広げられる。

アニメの主人公、役者、スポーツ選手、物語の名場面、有名な建築物、怪獣などに似せて作った大きな迫力ある雪像が立ち並ぶ。大きいのは高さ 15 近くある。

使われる雪は、自衛隊などが何十台ものトラックで運んでくる。

毎年、200 万人を超える観光客が訪れる。



・針供養

2 月 8 日。裁縫などで折れた針の供養をする。

感謝を込めて、針を軟らかい豆腐や「こんにゃく」に刺して神社に奉納する。

・かまくら

道端に高く積み上げた雪を固めて、中をくり抜いて作った部屋のこと。

大きいのは縦横約 2 近くある。敷物を敷いて明かりをつけ、中で食事やゲームを楽しむ。東北地方に多い。

毎年 2 月 11 日頃から秋田県横手市内の各地で作られる「かまくら」が有名だ。



・梅

寒さに耐えて咲く「梅」の花は、清楚で香りがよくて、気品高い。

めでたいことの代名詞である「松竹梅」の一つ。白梅、紅梅、枝垂れ梅など。

「梅」の枝で鶯が「ホーホケキョ」と鳴く情景を表した「梅に鶯」は、早春を象徴する言葉だ。

「梅」の種類ではないが、この時期に、黄色くて香り高い花がやや下を向いて咲く「蠟梅」もある。「梅」と同じような形の花で、色が「蠟」（黄色い油脂状の化学物質）のようなので、この名前が付いた。

「梅一輪 一輪ほどの 暖かさ」（服部 嵐雪）

